

## ニッポナリアと対外交渉史料の魅力 (24)

たりますが、それまでも鎖国を承知で来航する外国の船舶がありました。アメリカ船も例外ではなく、1797（寛政九）年と翌年にオランダ東インド会社に雇われて長崎に入港したエリザ号をはじめ、1837（天保八）年にマカオから日本人漂流民の送還のために江戸湾へ入ったモリソン号などがあります。しかし、目的が果たしたのはオランダの傭船だけでした。

1845（弘化二）年には、捕鯨船マンハッタン号が鳥島で漂流民十一名と大島沖で十名を救助して、浦賀沖で徳川幕府に引き渡しています。これは、老中阿部伊勢守ら幕閣がオランダ商館長を通じて、先のモリソン号の来日目的を知っていたことから行った措置で、幕府はマンハッタン号に対して謝辞を述べ、薪や水、食糧などを提供して退去させるなど、鎖国体制の成立直後と比べて対応に変化がみられます。ただ、これらの船舶はいずれも個人や企業のもので、アメリカ政府が関与したものではありませんでした。

しかし、このビッドルの来航はアメリカ政府が派遣した正式な使節であり、幕府は戸惑いながらもマンハッタン号の前例を基に柔軟に振舞っています。ビッドルは浦賀奉行大久保因幡守との交渉で、清国と同様に日本もアメリカと通商条約を結ぶべきであると口頭で申し入れましたが、外交交渉としては異例なことに日本側に促され、その場で準備してビッドルが署名した書面を提出しています。これは、七年後にペリーが周到に計画を練り、フィルモア大統領の書簡を携えてきたこととは大きく異なります。

### ■本学図書館に残るこの時の絵

当時の浦賀近辺では、おそらく役人に制されながらも異国の巨船を一目見ようと多くの人々が海岸へ出向いたのではないのでしょうか。その人の中に、スループ型軍艦ヴィンセンス号を描いた人物がいました。本学図書館が所蔵している絵は、その時の艦船や人物を描いたものですが絵師などは不明です。和紙上に描かれた彩色画の右上部には『弘化三年丙午閏五月浦賀江渡来亜墨利加軍艦と乗組員之圖』と筆書きされ、一枚の長方形の紙を六曲に畳んだ所謂「折り本」<sup>③</sup>形式の書物（縦47cm・横29.5cmで表紙は布貼り）に九枚の絵が貼られています。先頭に貼られた軍艦の絵は遠近法を用いて写實的に描かれ、ラスト上の旗や艦尾に掲げられた国旗も見事にた

なびいています。

なお、この書物の中のそれぞれの絵には「ボストン」と書かれていますが、この年はコロンバス号とヴィンセンス号の他にボストン号が来た記録はなく、艦名に間違いがあります。ただ、アメリカ海軍の記録ではヴィンセンス号が「ボストン号クラス」の同型艦となっていることから、おそらく乗組員の説明を日本人通詞が誤って理解して絵師に伝えたものと考えられます。

さらに、この書物には「弘化三年丙午閏五月浦賀江渡来亜墨利加人將官也」として、軍服を着た人物が描かれた絵も貼られています。浦賀沖に停泊した二隻の艦船は、幕府側の多数の小舟に取り巻かれて上陸が許されず、一般の日本人との接触がなかったことから、折衝のために乗艦した絵心のある幕府役人、もしくはその下士が描いたものと考えられ、ヴィンセンス号の絵とは別人であったのかもわかりません。

このように、百六十四年前の日本人は鎖国の真ただ中の出来事を絵に描いていたのです。しかし、これから述べる事件について、当時の人々ほどの程度、知らされていたのでしょうか。

### ■日本人、ビッドルを殴打する

幕府が返書をビッドルへ手渡す二十八日、幕府の担当者を震え上がらす事件が起きました。この顛末はビッドル自身が後に「不愉快な出来事」として次のように述べています。

「その役人が將軍の書簡をもってジャンクに乗ってきた朝、それを受け取るため私がジャンクに乗るようにいつてきた。私はそれを拒否し、通詞に託された私宛の書簡はこの船上で受取りたいといった。役人はそれに同意した。だがその時、私の書簡は米国船上で受取ったのだから、將軍の返書は日本船上で手渡すべきだと思うといった。役人は自己の主張を通そうとしたが、私が反対するとすぐそれを撤回した。がここで私は相手を喜ばせるのが上策と考え、私の方から日本船に赴き書簡を受取りたいと通詞に伝え、一時間後、制服に着替えて日本船の舷側に着いた。しかし船に上った瞬間甲板にいた一日本人が私を殴打し突き飛ばしたので、ボートに押し戻されてしまった。私は通詞に、すぐあの男を捕えよと命令し米船に帰ると叫んだ。すると通詞と日本人数名が走り寄ってこの不祥事を謝罪